日隆教学の方法をめぐって

大平宏龍

目次

一、問題の所在
二、日隆教学研究の資料論
（一）教学研究資料の概観
（二）著作の見方
三、日隆教学の方法論について
（一）著作内容からの分析
（二）教学の方法と具体例
1、日蓮遺文の集輯と理解
（1）遺文の集輯
（2）遺文内容の把握
2、日蓮遺文と原始天台
3、原始天台と日本中古天台
4、日蓮遺文と日本中古天台

5、教学方法論成立の原因
四、日隆教学の結論とキーワード
五、結語

一、問題の所在

日隆聖人（一三八五～一四六四、以下、隆師）は『弘経抄』第八八巻に、

日存聖人の仰せに云く、当門流の法門は御抄を以て能眼能照となし、玄文止の六十巻を以て所眼所照と為して、中古已来天台宗の法門に真偽を加え、邪正を分って捨邪帰正する法門なり。[1]

という。この文は隆師の日蓮遺文第一主義を示すものとしてよく引用される。日蓮教学を考究する為には、日蓮遺文を中心資料とすることは今日としては当然のことと思われるが、しかし、隆師の場合は、これにも論ずべき点がある。また周知の如く、日蓮遺文の中には天台三大部ないし、それに対する妙楽の注釈等が多く引用されているが、それをどう理解するかを踏まえつつ、一般的に日蓮教学として天台三大部本末等をみる場合は、日蓮遺文の立場からその内容を検証する必要をここでは主張している。それだけでなく、日本中古天台の義に真偽を加え邪正を分別して捨邪帰正しなければならないというのである。

即ちここには、天台・妙楽の三大部本末のみならず、日本天台の中古の教学（いわゆる中古天台の義で、思想的には天台本覚思想）に対して、積極的に関わり、それを日蓮義からどうみるか、そのことを判断するのが、自ら（日像門流）の教学にとって重要な要素であることを宣言しているのである。今の文は「存師の仰せ」として示

されているが、隆師の回顧によれば、

但し存道両師並に日隆に至って三代三十余年の間、在俗等の折伏弘通を指し置きて、諸御抄を集め、六十巻の淵底を伺い、当流の教観を明して談ずる処の法門なり。若し謬解有らば、後学に呈露して速かに添削を希うべし。去りながら尼崎流随分の己証なり。[2]

とある。隆師の教学は日存（一三六九～一四二一）・日道（一三八三～一四二四）両師の研究を承けた所に成立しているのであり、隆師が独自に展開した法義があるかと考えられる点もあるが、[3] 教学の方法に関しては一貫しており、この場合の「存師の義」とは即ち「隆師の義」と考えてもよいと思われる。そうすると、そこになぜ中古天台義と積極的に関わることが必要とされるのであろうか。浅学の私には未詳であるが、日蓮門下として、意識的に中古天台義と関わることを教学の方法として明言した先師がいるのかいないのか、問題である。しかしともかく隆師教学にとっては、これは不可欠な要件となっているのである。更に、これに関連して興味深いのは、この方法論は、隆師の意識の中にのみあったのか、それとも隆師の著述に具体化されているのか、という点である。此等の点についての専論は、管見に於ては見出すことはできない。即ち、拙稿を試みる所以である。

二、隆師教学研究の資料論

（一）教学研究資料の概観

隆師の著述は従来、三千余帖と言われるが、無論これは白髪三千丈の類で、多量であるとの謂である。しかし、

隆師の著述が、日隆教学研究上の主たる資料であるからには、具体的な全体像が示されねばならないし、それをどう整理し、どう秩序づけて考察するか、が重要である。即ち後述のように、隆師の教学思想には展開が認められるのであり、そのことを考慮しなければ、正しく隆師を理解したことにはならないからである。

管見に於て、これまで隆師の著述は、その主なものは紹介されてきたが、厳密にその全体が示されたことはなかったようである。更に、その教学思想の展開をふまえた整理に至っては、全く論じられることはなかったのであり、隆師の教学の方法を考察するについては、今日では資料論は不可欠なことと考えられる。

まず、隆師の著述としては、管見に於ては一八部二七四巻とみられる。その内容は左の通りである。

(1)他宝抄　一巻〈能〉
(2)四箇口決　一帖〈能〉
(3)六箇口決　一帖〈某蔵〉
(4)私新抄　一三巻一四帖〈能〉
(5)御書文段集　六巻
(6)当家要伝　一巻
(7)十三問答抄　上下二巻
(8)法華天台両宗勝劣抄（四帖抄）　四巻
(9)本門戒体見聞（三帖抄）　三巻三帖
(10)日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞（題号の下は二帖抄、法華の下は五帖抄）一六巻（目録共）
(11)玄義教相見聞（一帖抄）　一巻

(12)止観見聞　一六巻
(13)六即私記　三巻
(14)私経大意　四巻
(15)法華宗本門弘経抄　一一七巻（内目録四巻、本文一一三巻）
(16)開迹顕本宗要集　六六巻（仏部第一の最略本を除けば六五巻）
(17)玄義一部見聞　二巻
(18)本門法華宗開迹顕本玄文止三大部略大意抄　一七巻

以上に於て、後述の如く著述年については筆蹟と内容から推定する以外にないものがあり、現時点での順序は確定的でない所があることをお断りしておきたい。なお、全体の合計巻数も、『宗要集』は現存本としては六六巻とされるので、合計二七四巻となる。但し『宗要集』の活字本は六五巻となっており、また「著述」の捉え方によっては、数え方の異同もあり得る。（〈　〉は現蔵者を示す。）

これらの著述は、隆師の教学の方法と密接な関係が考えられるのであるが、この他に隆師が編述した抄録・覚書の類があり、著述と不可分の内容とみられるものもあるので、それも著述と併せてみておく必要がある。即ち、

(1)玄義要文　一巻
(2)文句要文　二帖二冊〈能〉
(3)諸御抄立所　二巻二帖
(4)玄文止諸御抄出所　一巻
(5)開目鈔之抄　一巻

(6)四信五品鈔之抄　一巻
(7)守護國家論之抄　（守護国家論文段の末尾に付されているものを仮称）
(8)条箇付　一巻
(9)文句要伝　一巻〈能〉
(10)玄義一部難字集　一帖〈能〉

がそれであり、更に隆師所持の法華経と科註、即ち、

(1)心空嘉慶版妙法蓮華経　全八巻八冊
(2)科註妙法蓮華経　全十巻

も注意される所である。この他に「書簡」「法度、定書、誓状、血脈」「真蹟断簡」「所持に係わる日蓮遺文、諸写本」等もあるが、著述を含む全貌[4]は、別に総合目録を試みたいと考えるので、それを参照されたい。

（二）著作の見方

さて、隆師の著述の主なものは、株橋諦秀（日涌）稿「日隆聖人教学の序説[5]」によって、初めて編年的に整理された。その場合の編年の根拠は、『宗要集』以外ではごく稀にみられる著述年等に関する記事と、自著の引用によって考えられる著作順序、それに筆跡の考証によるものであった。隆師の著述は殆んどすべて真蹟が伝存し、直弟子の写本で伝存しているものでも、隆師自身による書き込みが認められる場合があり、それは真蹟と同等の価値が認められる。それ故に、著述の前後関係のみならず、現時点でも、ある著述の成立の事情さえ考察できる場合もあり、後述のように著作年の推定につながることとなる。

私見では、隆師の著述については、以上の点に加えて、一、著述年の判明している書物の引用のある場合[6]、二に著作の成立の特別の事情[7]と、他の著述との間の教学思想の展開[8]の跡が顕著であると認められる場合、三に晩年の大部の著作にみられる共通の著作パターン、の三の事実をも考慮すべきであると考える。

著作の成立の特殊な事情を推察できるのは、『私新抄』である。それは『四箇口決』『六箇口決』等と共に、当初「私」と書かれた隆師の研究ノート群の存在が推定でき、その中から隆師によって選び組織だてられた十三巻十四帖の書物が『私新抄』となったとみられることである。その内容は、隆師教学の綱要書といえるものであるが、ただ法華経観においては、迹門―理具三千、本門―事具三千、題目の、私に言う所の法体二重説で現存の『本尊抄文段』の構想にも一致するのに対して、迹門―理具三千、本門―事具三千、本地本門―事行の題目、という私のいわゆる法体三重説は『法華天台両宗勝劣抄』で確立し、これ以降の『弘経抄』『宗要集』など大部の著述に一貫している。この故に『私新抄』は隆師教学確立以前に位置づけるのが妥当と考える。

これに対して、隆師晩年の大部の著述は、法体三重説でも一貫しているが、次の如く、著作パターンが共通である。つまり、

名目見聞　柏原貞舜の『七帖見聞』等を著述の契機とする。[9]

弘経抄　『法華文句』によるが、解釈の手がかりとして、『三百帖』の類を契機とする所がある。[10]

宗要集　政海の『宗要類聚抄』等を契機として著述されている。[11]

三大部略大意抄　天台三大部を対象にする。[12]

即ちこれらは、特定の著述、或いはテーマを対象として、確立した日隆教学の立場からその解釈を示した、応用篇であるといえよう。

以上の私見をもとに、隆師の著述の全体を整理するならば、その成立史的分類を試みることができよう。即ち概要を図示すれば、

- 教学形成期
  - 前期―他宝抄
  - 後期―私新抄・本尊抄文段
- 教学確立期――法華天台両宗勝劣抄（四帖抄）・玄義教相見聞（一帖抄）など
- 教学応用期――名目見聞・弘経抄・開迹顕本宗要集・三大部略大意抄

ということになる。ここに教学応用期とは、前述のように、教学の基本的思惟は変わらず、解釈の対象が広げられた時期ということである。なお、著作内容に注目し、その主題別に分類を試みれば左記のように考えることもできる。

1、法華経　他宝抄・私経大意・弘経抄、書簡の「法華経信行信者事」等が挙げられる。

2、日蓮遺文　御書文段・諸御抄立所・御書抄など。

3、天台学　止観見聞、玄義一部見聞、三大部略大意抄・玄義一部難字抄など。

この外に日蓮遺文と天台学との両方に関するものとして、『文句要伝』『玄文止諸御抄出処』もある。これはそれぞれ『弘経抄』と『三大部略大意抄』の製作の為の用意の所産とみられるものである。但し、右の内容上の分類は強いてのことで、隆師の著作はすべて日蓮教学に関する内容である。

さて、一八部の著述のうち、質量ともに主著とみられるのは『弘経抄』『宗要集』であるが、株橋日涌先生は、これに『三大部略大意抄』を加えて、隆師の三大部[13]とみられている。

三、日隆教学の方法論について

（一）著作内容からの分析

前掲の『弘経抄』第八八巻の文を、隆師の著述の上で検討してみると、次の四種の方法に分けて考えることができよう。即ち、

1、日蓮遺文の集輯と全体的把握の努力
2、日蓮遺文と原始天台との対比研究
3、原始天台と日本中古天台との対比研究
4、日蓮遺文と日本中古天台との対比研究

の四種であるが、先の文例でも知られるように、方法論の目的は、今の第4、日蓮義から日本中古天台の義をどうみるかにあり、1～3は、第4のための視座の確定にあったともいえよう。そして、これらの検討は日蓮義の存在理由を明確にする為であり、その上で改めて日蓮遺文に基づく日蓮義を示すことが、隆師教学の最終目的であるのは言うまでもない。

（二）教学の方法と具体例

1、日蓮遺文の集輯と理解

（1）遺文の集輯

よく引用される所であるが、『十三問答抄』では、日蓮遺文集輯の困難を、

高祖師一期生の諸御抄は在在所所、寺寺院院にこれあり。返す返す之を秘して悉くは拝見に及ばず。[14]

という。本禅寺日求師の『童蒙懐覧集』では二三篇の遺文をあげて、それを拝覧するについて三ヶ条の条件をあげ、日選（日存？）・日隆両師のものという誓約書を示している。[15] このような状況の中で、日蓮遺文の量と質の追求は止むことなく続けられ、恐らく『弘経抄』の著述の始まった頃と考えられる文安三年（一四四六）九月二十二日に隆師の直弟子の智本師が甲斐国久速の安国山立正寺で『富木入道殿御書』を書写し、文安四年正月二十六日には、『観心本尊抄副状』を書写している。[16] また隆師所持の遺文のうち、現存三三部のなかで『開目抄』『顕立正意抄』は重複している。このことは、存・道・隆三師が未見の遺文はもとより、既に写本を所持しているものも、本文の正確な理解の為に、労をいとわず書写を続けたことを示すものであろう。然し、隆師所持の『観心本尊抄』は、真蹟では「如是本尊在世五十余年無之」とある所が「如是本尊在世四十余年無之」となっていたのは明らかであり、[17] 真蹟遺文に接し得たのは恐らく妙顕寺（当時は妙本寺）蔵の『八宗違目抄』のみであった[18]のではなかろうか。

『私新抄』第八巻に、

何にも日蓮聖人の御判釈に、信心を強盛に致して願力を発して日夜朝暮にこれを拝見し、かながき・あて

字・下りがき、文体の不定なる事を目に懸けず、法門の大都かうがい（梗概）を見て取るべし。[19]

とあるのは、隆師が日蓮遺文に対する態度として注目すべきであり、日蓮遺文に対しては文段による解析・所出の法門への注意などに力を注ぎ、細かな語句の注釈は為していない点で、右の文意を自ら実施したものと考えられるが、写本のみに拠る不確定な要素も考慮してのことであったのかもしれない。『弘経抄』の著述が始まった段階でも、智本師が遺文の書写を行っている事実が、そう考えさせるのである。

さて、隆師がどれほどの数の日蓮遺文を集輯し得たかは一箇の問題である。曽て浅井圓道氏は、『私新抄』『十三問答抄』『当家御要伝』（『当家要伝』のこと）『四帖抄』を対象として統計をとった結果、

実際には日隆はどの程度の御遺文を駆使していたかを研べると、録内収録のもの五十余通、録外収録ものも十余通、録内外にないもの一通、それに祈祷経となっている。（引用者中略）この僅少の御遺文によって宗祖の教学を組織的に知ろうと望むとき、三大部の約部釈、本迹釈の補意を求める必要が出てくることは当然である。[20]

等と、「手持ちの御遺文が少なかった」ことを問題とした。これが事実とすれば、「御抄を以て能眼能照とし」という教学の方法は、理論倒れとなりかねない。そこで私は、浅井氏の挙げた四書を含め、一五種の著述と、現存御書写本（二七書）を調査した所、一一二書の書名を確認した。[21]但し、この時は『宗要集』は刊本の第四・第五巻は未刊であり、その他未調査の部分があった。現在もまだ充分とは言えないが、確認した書名は一二二書となり、その内の現存御書は重本二書を除いて三一書となっている。[22]結論を言えば、隆師のとりあげた日蓮遺文は、現行刊本からみると、数の上では少ないと見られるかもしれないが、日蓮教学を論ずる上では質量共に十分であるといえよう。[23]

隆師の記述によると、「一四八通の目録」（いわゆる録内目録とされる）は既知である。[24]但し当時の状況として、

そのすべての写本を所持していたか否かは定かでない。[25] もっとも「諸御抄を極むること数百遍に及び」[26]ともある。「数百遍」は恐らく「数百回」の意であろうが、隆師所持と考えられる現存写本三一書のうち一六書は引用がないようであるから、披見したが引用はしていない遺文も恐らく数多くあったと見られる所である。

（2）遺文内容の把握

隆師の著述にみる時、日蓮遺文について、一般に行われるような「三大部」や「五大部」という格付けはない。又、『立正安国論』の引用が極端に少ないことも、遺文観としては特徴的である。[27] 隆師の著述における遺文の引用は、常に一定の基準があり、それを顕著に示すものは『御書文段』である。そこでは、『本尊抄』の内容から各遺文を照射する方法がとられている。[28] 文献的な前後関係は未詳であるが、所見の遺文全体の見方は三書の『御書抄』や『諸御抄立所』などに示されるような、各遺文の内容の検討の上に帰納的に導かれたものと思われる。[29] 『本尊抄』を能照・能開とするということは、隆師の場合、上行要付＝末法下種論にたつ遺文解釈の立場を表明するものであるが、そこに至るまでには、種々の研鑽があったとみられ、『宗要集』仏部第九では、

記者の愚老、天台宗の室に入り形の如く二八帖疏の教重の上に行証の二重を極むと雖も、終に三千の実体を了せず。当宗に還って日存・日道の両師に値ひ奉りて観心本尊抄・開目抄相伝の時意得奉る者なり。天台宗に玄義・文句に一念三千を明さず、法華経にも明さず、止観真言ばかりに之を明かすと云ふは天下第一の大僻見なり。[30]

とあり、後述の中古天台批判にまで及んでいる。この場合、「三千の実体」とは『開目抄』『本尊抄』に極まる成仏の種子（仏種子）を意味すると思われるが、そこには、隆師の日蓮聖人教学に対する注目すべき視点があると思われる。それは後述するとして、日蓮遺文の教学的極まりを『開目抄』『本尊抄』にみ、更に『本尊抄』を中

心とするということでは、一部の例外はあるとしても、今日ではほぼ一般共通の理解であろう。しかし、隆師が『弘経抄』第七五巻に、

されば諸御抄の中には観心本尊抄を以て総の肝要とす。[31]

という時、その意味は、『本尊抄』の最末の五一字の意で全遺文を解するということであり、一般の本門法体の四五字（四五字法体段）を中心とするみかたとは異なるのである。即ち『宗要集』教相部第七に、

開目抄・観心本尊抄は三大秘法の中の本門の本尊一箇の実体を釈し、開目抄は本門妙法蓮華経の体具の本因本果本国土事三千を釈し顕わし、観心本尊抄に至て三千を以て妙法蓮華経に裏みて上行に付す相を判じたまへり。[32]

とあり、『宗要集』教相部第八に、

此の結文（引用者注本尊抄末五一字）一部の肝心なり。是れ諸御抄の詮要なり。[33]

と結論づけられる所である。ここに至る過程で特に注意すべきは『開目抄』も終わりに近い所にある、

又仏になる道は華厳ノ唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪観等も実には叶ッべしともみへず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。此一念三千も我等一分の慧解もなし。而ども一代経々の中には此経計リ一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉ににたる黄石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶仏にならず。此経は愚人モ仏因を種べし。不求解脱解脱自至等云云。[34]

の箇所に対して、隆師の『開目抄文段』では「今家の宗旨」と科文していることである。[35] つまり、この文に、日蓮教学の梗概と結論が示されているとみたのであり、それが『本尊抄』の末尾の五一字、原文で示せば、

不識一念三千者仏起大慈悲五字内裏此珠令懸末代幼稚頚四大菩薩守護此人大公周公摂扶成王四皓侍奉恵帝不

異者也[36]

の文意に厳密に示されたとみるのである。[37]『本尊抄文段』における隆師の此の文に対する科文は、

大文第三、惣じて一部の文を結す。別体理具三千の智者の解行を以て南無妙法蓮華経に摂して、末法悪人下種の正行と為す。[38]

である。「別体理具三千」は確立した隆師教学では「別体事具三千」と解されるが、[39]『本尊抄』の結文の意ですべてを解するという見方は、隆師教学の結論としてそのままに認めなければならない。日蓮教学の見方としては、一般には意見の別れる所ではあるが、隆師教学に於ては、その見方が確立されて以降の著述は、この立場から著されているのであり、それを前提としなければ、隆師の著述については誤った理解となるであろう。

なお、隆師が日蓮遺文をみる場合の座標として『三沢抄』[40]によって佐前・佐後を分つ場合があるが、[41]これは真言宗破折に関してのみであり、すべての遺文を編年的に位置づけてのことではない。又、宗祖の身延入山の前後を摂受・折伏に分けて論述される場合もあるが、[42]これも遺文全体と関連づけての事ではない。あくまで『本尊抄』の結文の意を本として他の遺文をも解釈してゆくのが、三師あるいは隆師の遺文観なのである。

2、日蓮遺文と原始天台

隆師の教学の方法の次なる問題は、「日蓮遺文を能眼能照として、玄文止の六十巻を所眼所照とする」というのであるが、その実際はどういうことであろうか。

まず隆師の著述中に於ても、いわゆる台荊異目が問題とされることもある。[43]しかし、今の引用文の如く、多くは天台三大部とそれに対する妙楽の注釈を共に挙げて「天台本末六十巻」などと称して日蓮遺文に対することが多い。その本末六十巻の立場を今は原始天台の義としておく。その原始天台の義を、日蓮聖人は『摩訶止観』所

説の一念三千に於て捉え、その解釈を展開することによって、日蓮義を示されたことは、大よそに於て諸家の一致する見方であろう。即ち原始天台義と日蓮義とは、連続と不連続の両面をもつといえる。問題は、不連続の面をどうみるかである。この点で宗祖自身は、一念三千義については『十章抄』[44]『開目抄』[45]『治病抄』[46]『真蹟断簡三四八』[47]などに、その相違する所を述べているが、特に注意すべきは『本尊抄』に、

像法の中末に観音・薬王、南岳・天台等と示現し出現して、迹門を以て面と為し、本門を以て裏と為して百界千如一念三千其義を尽くせり。但だ理具を論じて事行の南無妙法蓮華経の五字、並に本門の本尊未だ広くこれを行ぜず。[48]

と述べられていることである。これに従って推論すれば、聖人が天台（ただし原始天台）の義を迹面本裏と規定されていることが明白であり、それによって日蓮義が本面迹裏と規定されることは大方の一致する所であろう。またその下の文は、天台の一念三千は理具の次元で論じられているが口に南無妙法蓮華経と唱えること、並にその原拠としての本門の本尊は、未だ行われていない、との意に解される。[49]

ところが、『四信五品抄』では、

文句の九に云く、初心ハ畏縁ニ所レテ紛動セ妨レ修スルヲ中正業ヲ上。直チニ専持ツ此経ヲ即上供養ナリ。廃シテ事ヲ存ルハ理ヲ所益弘多ナリト。此の釈に縁と云ふは五度なり。初心の者が兼て五度を行ずれば正業の信を妨ぐるなり。譬へば小船に財を積みて海を渡るに財と倶に没するが如し。直専持此経と云ふは一経に亘るに非ず、専ら題目を持ちて余文を雑えず。尚ほ一経の読誦だも許さず、何に況んや五度をや。廃事存理と云ふは、戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云。所益弘多とは、初心の者が諸行と題目と並べ行ずれば所益全く失ふと云云。[50]

とあって、ここではたとえば疏の九の文中の「理」を直ちに題目と解されている。このような原始天台の文の両

様の解釈を、『摩訶止観』の、

天親・龍樹内鑑冷然タリ。外ニハ適フ時ノ宜シキニ各権カリニ所アリ拠ルル。[51]

の文の解釈をふまえて、隆師は外適時宜・内鑑冷然の両様にみるべきであるとした。この見方は隆師の著述のあらゆる所でみられるが、特に『四帖抄』第四では、

天台所説の玄文止において二筋これあり。内鑑と外縁となり。内鑑は本門、外縁は迹門なり。都合、迹面と本裏との玄文止なり。内証本裏の辺をば末代同我の後哲に贈らんがために文底に秘してこれを沈め、意密に日蓮聖人に贈り奉る云云。[52]

等と述べて、原始天台義と日蓮義の連続面と不連続面を明確にしたとみられる。この日蓮義と原始天台義を、対照的に図示すれば、

- 外縁迹面―迹門流通
  - 玄義―体所摂の五重玄義釈
  - 文句―迹中法華経の入文解釈
  - 止観―三千三諦の法行観心
- 内鑑冷然―本門流通
  - 玄義―総名妙法蓮華経の五義釈
  - 文句―唯本地法華経の解釈
  - 止観―総名妙法蓮華経の観心

と解される。[53] その対照を示した典型的な著述が『四帖抄』であり、内鑑本密の三大部の具体的な所産が、『止観見聞』『玄義一部見聞』、なかんづく『三大部略大意抄』であると言えよう。『私新抄』にも、この原始天台義の見方は示されているが、法体三重説が確立した『四帖抄』に至って、この見方が更に明確となり、天台義に対す

る日蓮義の存在理由が明らかとなったといえるのではなかろうか。

3、原始天台と日本中古天台

原始天台の義と日本中古天台の義との比較を隆師が行っているのは、「中古已来天台宗の法門に真偽を加へ、捨邪帰正する」ために、不可欠のことと考えられたためと思われる。後述のように、そもそも存道隆三師が行った教学研究の動機としては、門下の諸師が中古天台の談所で学び、その影響を受けて日蓮義を解釈したとの認識がある上に、当時の中古天台義からの日蓮義への批判があったことが、根本の理由であろうと私は考えている。その批判とは、日蓮義は始覚義であり、本覚義を知らない、ということが主なるものであったようである。これに答えるためには、日蓮義と天台義の教学思想を根底から見定める必要があり、その問題意識の上で、天台教学史上での原始天台と日本中古天台を検討することも行われたものであろう。中古天台側からの思想的批判については、後に改めてふれることとして、ここではそれに関連する中古天台の教判とみられる四重興廃・三種法華等のうち、四重興廃についての隆師の言及を問題としておく。これは次項の「日蓮遺文と日本中古天台」の対比研究の問題とも直接関わることで、しかも興味深い視点が明らかだからである。

四重興廃は、『法華玄義』巻二で、五重各説の妙字釈のうち絶待妙を明かす所で、絶を以て妙を釈すとして「方便之教、迹中大教、本地大教、観心之妙」の相互の能絶・所絶を示したものであるが[54]、中古天台義においては「尓前ノ大教、迹ノ大教、本ノ大教、観心ノ大教」（いわゆる昔迹本観）の段階的興廃と解し、「観心ノ大教」＝「止観」として、止観勝法華の主張等となった。これについては、『立正観抄』に批判があり[55]、隆師もそれを引いて批判を展開している。即ち『弘経抄』八一には、

四重は教観の二なり。教観は在世滅後、正宗流通、能観所観の異なり。…此の四重興廃のことは立正観抄に

委悉なり。[56]

とあり、殊に『私新抄』の第二では「四重興廃ノ事」と題して詳細に批判がなされている。

口伝に云く、玄義の第二に四重興廃を判ぜり。当世の天台宗は此の文のくいぜ（株）をまもり、法華経より止観は勝れたりと云う大謗法・大僻見を云い出だしたるなり。玄の二に云く、迹の中のごとき、先に方便の教を施さば、（中略）絶を以て妙となすなり云云。籤の二に云く、教と本迹と及以び観心と（後略）、此の謂いなり云云。本末の前後を見るに、教観の不同を判ぜり。爾前・迹門・本門と次第を定め、言語を以て他の事を沙汰する分は、何なる本門終窮の極理とも云え教門なれば、爾前・迹門・本門の大教を絶して、己心の権実本迹を観じて一念一心の処に万法を収め、心外の言語教門を絶して唯一実性・無空仮中たる心性不思議の一絶を修行せんがために本迹の大教を廃すとは釈したまうなり。しかるに本門実相の外に観心の至理と云ふ事これありて、観心の理の勝れたりとは心得べからず。一代経教の至極は本門なり。本門の外に何なる深理かこれあるべけんや。観心と云うは、本迹の経に依って経の義味を聞いて、次に己心の経を尋ね顕わすを観心と云うなり。[57]

この例をみてもわかるように、隆師は四重興廃について中古天台の解釈を原始天台の義によって批判する。これは三種法華についても同様である。[58] 後述の如く、日蓮義は始覚義であるとの批判に対しても、原始天台の義こそ始覚義であり、それが本来の天台義ではないかと論じるのであり、明確な理解が示されている。

4、日蓮遺文と日本中古天台

『私新抄』では前掲のように、中古天台の四重興廃を、原始天台の義から批判しているが、その次の箇所では「法華宗の意は四重興廃を用ふるや」という標題の下に、また別の議論がなされている。

蓮師聖人は無智の日蓮と仰せられたり。一念三千の重宝を妙法五字のふくろにつつむとも判じたまう。末法の愚人は観心に堪えずと云う事は文義分明なる者なり。此の方は一分四重興廃を用いずと云うべきか云云。

（引用者中略）さて本地久遠の釈尊本因妙名字即の時の口唱の南無妙法蓮華経を我等が身上の所作なりと信ずれば、本門を廃して観心を用いて、四重興廃これを用うと云うべきなり。これを秘すべし、これを秘すべし。[59]

とあるのは、「四重興廃」を『法華玄義』の本来の義で解した場合には、日蓮義では用いられていないと言うべきであるとする。即ち前述の如く、天台本来の義は像法時代の高い機根の衆生に対するものであり、日蓮義は末法の下機に対するものであるから、このような四重興廃は用いられないというのである。

然し、日蓮義の場合には、久遠の釈尊の本因妙名字即の修行、即ち口唱の題目を我身の上に実践することであり、この場合には本門を廃して観心を用いることとなり、即ち四重興廃を用いることとなるという。この場合、本門を廃し観妙を用いるというのは、実は、正宗を廃し、流通による、あるいは所観の境に対する能観の智、更にいえば「本門無教、教即観心」[60]の義で、中古天台の四重興廃とよく似てはいるが、義は異なるのであるとする。即ち『弘経抄』第一巻では、

此の御抄〔私注、『四信五品鈔』〕を以て消すれば、玄の二の四重興廃の観心の大教興れば本門の大教を廃すと云ふ所廃の本門は一品二半脱益正宗の本門なり。能廃の観心の大教は末法の初めの為めの本門八品上行要付本因妙名字信行観心の事なりと交すべきなり云云。[61]

といい、『弘経抄』第三巻では、

観妙を以て本妙を廃すと云うは在世滅後・正宗流通・教観の異なり。法体に二ありて、本妙より観妙勝るると云うにはあらざるなり。（中略）日蓮宗の意は、爾前迹門は教のみ有って観無し、本門には教即観にして

教観一致なる故に本妙即観妙なり。故に本妙を廃して観妙を取るべからざるなり。但し一品二半顕本の本果の本妙を廃して八品所顕の本因妙名字の観心の妙を興すと云ふ事は、観心抄の大旨、日蓮宗の宗旨なり。彼の天台宗の義と名は似たれども義は異なり。所詮、本妙を廃して観妙を取るとは、本妙即所観の境となり、観妙即能観の智と成るなり。[62]

ともある所である。

このように、中古天台の四重興廃は、『玄義』（原始天台）の本来の義から批判し、また『玄義』の義も日蓮義から批判を行っている。その上で内容は異なると断りながら、思考形式は日蓮義として認めている。このことは、別に考察したように、[63]三種法華や略伝三箇なども同様である。これについては改めて細かく検討することが必要であるが、日蓮門下にあっても中古天台教学を学び、その考え方で日蓮義を解釈するという当時の大方の現実に鑑み、日蓮遺文による日蓮義の理解を、中古天台教学中の事項にまで及ぼすことにより、日蓮義の特色を示し、その地平を押し広げようとしたものではなかろうか。『弘経抄』中に『三百帖』関係の書より取材した事項について、法華経の解釈に資し、『宗要集』では、『宗要類聚抄』等の示す算題の中から、日蓮義として論ずべき優先順位を考察しつつ、天台義と日蓮義を示している所である。[64]

また『名目見聞』のような基礎的術語の解釈に於ても、『七帖見聞』等を選択して、そこから解釈を為している。[65]此等の事実は、隆師の中古天台義に対する対処の具体例としてみられる所であろう。それらに共通するのは、中古天台が提示する法門に対して、原始天台義からの批判を示し、次に日蓮義としてそれを論ずることの意義を考え、その上で日蓮義の解釈を示していることである。即ち積極的に日蓮義の地平を広げる努力が認められるのである。

5、教学方法論成立の原因

先にも少しくふれた如く、隆師は著述のあちこちで、中古天台義から日蓮義が批判されていることを問題としている。それは、日蓮義は相対妙ばかりであり、絶待妙を知らないという批判と、日蓮義は始覚義であり、本覚義でないという批判である。それは例えば『私新抄』第一二巻に、

末代は愚者、四海に充満し、一天下に周遍せり。かかる時分には内証は設い智者たりといえども、無智の過を恐れて、下機に随って教法を施設するに、得益は称計すべからず。蓮師御出世の正意是れなり。これを知らざる学者は、日蓮聖人の法華経の法門は始覚なり、相待妙の一分なり、観心開会の法門はこれを存知せず、但教相計りにして深理なし、と云う輩は、恐らくは蓮師の御門弟の中にもこれありと風聞せり。悲しいかな、蓮師の大悲をわすれて内証の幽旨を知らず。哀れなるかな、蓮師の善巧は謗心を恐れる事を。天台・伝教は能所倶に智者賢人なれば、教法の判教に畏るる所なし。末代の蓮師は智者のために文底に深理をうづみ、文相は愚者を本となして一切の判教を示す。愚者は開会観心の深理を聞いて誹謗を生ず。日像聖人、門弟に示して云く、教証二道を弁えずして観心の法門を言わん者は謗法に同ずべしと云えり。是れ則ち初心の行者を誘引する故なり。[66]

と考察されている。「蓮師御門第」云云は、恐らく『寺泊御書』中の記事などによるもの[67]と思われる。また像師の示教とは『定禁制條條』の中に「不レ知ニ教道証道ノ義ヲ一而於テハ下謂フ二観道之法門一ヲ之輩ニ上者不レ可レ為ニ妙顕寺ノ御門徒一」とあるのを指し、像門の伝統に基く議論であることを標榜したものと考えられる。つまり、日蓮義と原始天台義との対比において、像法―迹面本裏―高機、の天台義に対して、末法―本面迹裏―下機、の日蓮義の相違は明らかであるが、それは時機に依るものである。然るに、像法天台の義を継承している日本中古天台が、教相

を無視して観心を強調し、本覚を主張する中で[69]、日蓮義を批判するのは的外れであり、従って、

当時天台の末学は此の旨を弁えずして、止観の意を以て日蓮所立の本門宗を軽笑するは不可なり。また本門宗より天台宗を笑うも無案内なり云云[70]。

と言う。故に、

この意を知らざる諸法華宗は天台宗に相待妙の修行と笑われ、さっと領解して開会抄を作りてこれを擬免す。あるいは天台宗に移り還って法華宗を毀るは、堕獄疑いあるべからず云云。所詮、止観の迂廻の観心なるをば還って直行の観心と云い、法華経本門の諸経に引き替えて直入法華するをば還って漸機迂廻行と云う事は、もっての外の僻見なり[71]。

と批判するのである。この中古天台からの批判については、隆師の著述の各所に採り上げられている所であるが、『弘経抄』第九八巻に「不軽の弘経と日蓮大士の弘法とは相待妙の修行なりと云うべしや」と題して論じられているのを例とすれば、

迹門始覚の行は相待妙を斥いて絶待妙を取るなり。故に止観一部の意は相待妙を以て麁となし、絶待妙を以て妙となして章々段々唯一絶待の止観これを観ず。是れ即ち本に望むれば「教弥権位弥高」なる故に、止観の機は高尚にして下位に下らざる間、思議の辺を斥い不思議の絶妙を好んで法行観計りを修する故なり。是れ末代のためには過時の絶待止観なり。故に法然聖人はこれを捨てて念仏に移るなり云云。（引用者中略）

本門八品の会場は開迹顕本して「総在如来寿命海中」すれば十界久遠なる上に、無始法爾として本化・迹化を分かちて、先づ上行に付し後に迹化に付す。此等は不二の上の而二・無差別の上の有差、即ち絶待の上の相待・本迹一致の上の法爾の本迹にて法爾の本化・迹化宛然なり。故に四信五品の因果、随喜・法師の信行

信智、証人の不軽行と云うも皆理極事遍の絶待の上の本覚の相待妙の事行なり。日蓮大士はこれを取って末法に移したまえり。四信五品抄に云く、迹門より本門は下機を摂す。教弥実位弥下、これを案ずべし云云。所詮、相待妙に体なく絶待妙を以て体となす。絶待妙より極悪の下機に下るを相待妙と云うなり。されば釈尊・三世の諸仏菩薩・観音等の大慈大悲を取り集めてこれある大慈悲心を相待妙と云うなり。更に止観等に明かす相待妙にあらざるなり。[72]

等と、天台義は相待妙から絶待妙に向うに対して、日蓮義は、そこから下機に対する慈悲を以て相待妙に下るという。但し、相待妙の意味が異なるとして、日蓮義は絶待の上の相待等と示し、日蓮義の教相の上にのみ、真実の本覚があるとしている。[73] 右の引用の後にも種々の議論があり、「かくの如き重々の約束これあり。しかれば言異意同の大旨を弁えざる関東辺の法華宗の中に〈真問〉開会抄二帖を造ると雖も、諸御抄に違う。これを用るべからず」[74]として、『開会抄』を日蓮義と異なると批判するのである。

ここでは『四帖抄』にも採りあげられた『開会抄』の批判について、日蓮遺文の研究・日蓮遺文と原始天台義、原始天台義と日本中古天台義の研究の上に、あらためて日蓮義から批判を加えていることが理解される。ここに至って、冒頭に引用した日隆教学の方法がなぜ言われたかが明らかとなると思われる。

四、日隆教学の結論とキーワード

隆師は『名目見聞』第九に於て、

尋ねて云く、尼崎流として諸御抄の教観を一言に口伝する事これありや如何。答う、口伝に云く、教〈諸教

は五味、法花経は五味主。観ヘ迹門より本門は下機を摂す。教弥実位弥下と云云是れなり。[75]

と、日蓮聖人教学を結論づけている。「教」にいう五味主の教相とは、名称は『曽谷殿御返事』[76]によるが、内容は一往は三五下種、再往は久遠下種の所を真実の本門（五味主＝本地）とするという教相論[77]である。「観」の方は『四信五品鈔』[78]の文そのままであるが、隆師は「自迹門本門摂機」を必ず「自迹門本門摂下機」と引用している。日蓮教学の「教相と観心」[79]を論ずる場合、「観心」は多くの場合、南無妙法蓮華経とするのが普通であろう。それを隆師は、『曽谷入道殿許御書』の冒頭を例とすれば、「救助逆謗不如要法」[80]の逆謗に対する故に要法が用意されていると、下機の反省の上に題目の信仰があるということを「観心」と捉えているのである。

日蓮義と中古天台義とを対峙し、その相違を明らかにしながら、用いられる所は「助縁」として採りあげ、日蓮義の地平を広げようとしたと考えられる隆師教学に於て、恐らく最も注視した所が、末法下機の実態であり、それ故に、この点に於ては、決して、天台本覚思想の特色である「全き現実肯定」[81]は認められなかったことであろう。存・道・隆三師が、何故に、このような深刻な機根観をもったのかは、別に考究を要するが、この点の徹底が隆師教学の特色を示すものとなったことは確かである。即ち『弘経抄』第八六巻で、

諸門流の人人は上行菩薩に勝れたる釈尊第一の御弟子なる故に、釈尊より直授してこれを取るなり。日存・日道の両師は数ならざる下劣の御事にて之あり。故に釈尊より「以要言之」して上行の御手に請け取りたまいたる妙法蓮華経を、日蓮大士の御手より取りたまうなり。所謂本門八品是れなり。[82]

と述べる所である。『本尊抄』以降の確実な日蓮遺文の根底にみられる「上行付嘱」の教義が、法華経観の上で重要なだけでなく、末法下機の我々の為にあるという切実な反省がそこには歴然としている。隆師にとって、その「機根」観は、宗祖日蓮聖人に於ても例外ではなかった。すなわち『二帖抄』第二では、『玄義』序文にある

天台大師の十徳を、日蓮聖人の場合にどうみるかということについて、

此の如く法師品より神力品に至る経旨の本意は能開の要の釈尊、能開の要法を以て能開の要の上行菩薩に付嘱し、折伏逆化の「不受余経一偈」の要の無智の宗旨を立て、無智の日蓮を以て唱導と為し、無智の悪人を以て所化と為す。曾て自力を具せざる信心の弟子偏に法力経力を望む。能化所化のために説く処の未来記なり。若し爾らば日蓮大菩薩に十徳を備えざる中々の如説修行の行人なり。（引用者中略）

唯だ末代の唱導を無徳無行と計り云いては本門流通の日蓮宗の規模も顕われず宗旨の信心も立たざるなり。故に高祖の御本地は有智高徳の薩埵なりと云へども、末代相応の不軽の先証無智日蓮と応同したまう日は無智無徳なり。而るに此の無智無徳が即ち正像の諸師天台等の十徳に勝れたること百千万倍なり。[83]

と言われている。宗祖日蓮聖人に対する単純な信奉者には批判される恐れがあるが、隆師が、日蓮聖人の教学思想を徹底するとき、聖人自身も「無智の日蓮」であると言わねばならず、そう言い切ることで、日蓮教学の普遍性、あるいは世界性が確実なものとなるということであろう。[84] それ故に、私は、日隆教学のキーワードは、「無智の日蓮」であろうと考えるのである。

五、結語

以上、隆師が教学の方法として示した『弘経抄』中の一節について、些か考える所を述べた。問題は、なぜ中古天台義と積極的に関わることを不可欠としたかという点であるが、中古天台義から日蓮義に対する批判があり、それを解決しなければ、日蓮義の存在理由が主張できないと考えた所にその理由があるのではないかということ

が、私の推定である。隆師は「天台宗の諸聖教において真偽を加え捨邪帰正してこれを用いて助縁となす」ことを実際に著述として具体化した。それは日蓮義に沈潜するのみでなく、時代思想と対峙し、助縁とできるものはそれを利用することで、日蓮義の地平をおし広げ、題目弘通に資する為であったのではなかろうか。

この隆師の著述から私が考えることは、いわゆる「宗学」についてである。今日、宗学とは宗派の学として学問でないように言われる向きがあるが、宗学とは生死を生きる我々が「宗(むね)とすべき」学問と捉え直すべきではないか。宗祖の求められた所を、学問的に考究してゆく教学に対して、それをもととしつつ、時代思想と対峙しながら、現代如何に生きぬくべきかを問い続けること、それが我々の「宗学」であろう。そのことも、存道隆三師、就中隆師の著述が教えてくれているのではなかろうか。

註

(1)『日隆聖人全集』(以下、隆全)第九巻五三三～四頁。以下、隆師の著作は、書き下し文で引用。漢字・仮名も現代表記を原則とする。各種刊本の表記が必ずしも原本にある隆師の著述に忠実でない場合があるためである。この点は今後の課題としたい。

(2)『五帖抄』第五(『佛立宗義書』第三巻三二一頁)。

(3) 後述の如く、隆師の著述の成立史的分類を前提とすれば、私のいわゆる法体三重説は隆師独自の発揮かと推測される。

(4) いわゆる八品門流では、隆師の著述を尊称して「御聖教(おしょうぎょう)」と呼ぶのが慣わしである。しかしこれも、著述

をさす場合と、それ以外をも含む場合とがあって、曖昧である。そこで私は「御聖教」という時も、著述のみを指す「御聖教」と、それ以外をも含む「御聖教類」とを区別している。

(5) 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」(『桂林学叢』第四号所収、昭和三八年五月)は、はじめて隆師の著述を編年的に整理されたものであるが、そこに採りあげられた著述は、御書文段集・十三問答抄・私新抄・戒体見聞・法華天台両宗勝劣抄・玄義教相見聞・名目見聞・六即私記・弘経抄・宗要集・三大部略大意抄、の一一部である(三八~四一頁)。従来の日隆教学研究は、隆師の著述の成立順序などは殆んど考慮せず、内容のみを論ずるものであった。それ故、文字通り学問的な研究が、ここから始まったと言って過言ではないであろう。

(6) 『法華天台両宗勝劣抄』における『開会抄』の引用がそれである。同抄は永享六年の著であるから、それを引用することは、少なくとも、それ以後の著となる。(拙稿「『法華天台両宗勝劣抄』解題」(日隆著、法華宗興隆学林編『法華天台両宗勝劣抄(四帖抄)　法華宗全書　日隆1』東方出版、平成一一年、所収別冊)一〇頁。

(7) 拙稿「『私新抄』新考」(『興隆学林紀要』第一三号、平成二五年三月)。

(8) 拙稿「日隆聖人文献における『私新抄』の位置—事具三千をめぐって—」(『興隆学林紀要』第一〇号、平成一二年三月)。

(9) 拙稿「慶林坊日隆聖人著「名目見聞」について」(『印度学仏教学研究』通巻四七号(第二四巻第一号)、昭和五〇年一二月)、及び拙稿「日隆聖人著『名目見聞』の一考察」(『桂林学叢』第一〇号、昭和五三年三月)参照。

(10) この点については、法華宗教学研究所第二六回総会(昭和六三年九月六日)で「『本門弘経抄』考」と題して、『三百帖』との関係を口頭発表した。

(11) 拙稿「『開迹顕本宗要集』考」(『興隆学林紀要』第三号、平成元年三月)参照。

(12) 後述の如く、日蓮義からみた天台三大部の解釈を示すのが目的の著である。
(13) 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」(前掲、四一頁)。
(14)『十三問答抄』(立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』(以下、宗全)第八巻、山喜房仏書林、昭和四三年)四二一頁。
(15) 智門院日求著『童蒙懐覧集』(『宗全』陣門流部、三〇〇頁)。これを引いて、株橋日涌先生も「諸山所蔵の御書を拝見しようとすれば誓約書(起請文)を入れなければならないのは当然であった」と(株橋前掲稿、六〇頁)。
(16) 拙稿「日隆聖人と東国法華宗」(『興隆学林紀要』創刊号、昭和六一年一〇月)九八〜九九頁。この時に書写されたのは定遺番号で九三・一一九の遺文である。
(17) 拙稿「『観心本尊抄』「其本尊為体」の意味するもの—日蓮聖人の本尊義私案—」(『桂林学叢』第二四号、平成二五年三月)一二四頁注(58)参照。
(18)『弘経抄』第三七巻(『隆全』第四巻三九一頁)に、「諸門流並に目録に入れざる日像門流秘伝の八宗違目抄」とあり、他にも同様の言及がある。隆師が既に「一四八通の目録」を所持していた(後述)ことを考えると、各門流はそれぞれに目録を作成していた現実があり、その中で、「一四八通の目録」が、いわゆる録内目録と権威づけられていったのであろうか。
(19)『宗全』第八巻、二一八頁。
(20) 浅井圓道稿「法体勝劣論の考察」(『大崎学報』第一一一号、昭和三五年二月、三五頁)。なお、私に中略した(註)の中で、浅井氏は「録内外にないもの一通とは富木殿御返事(続下二)で私新抄(二七七)に引用があ

る」としているが、これは『立正観抄送状』の誤認である。また本稿中の隆師の法体論については、賛同し難い点が多いが、別の機会に論じたい。

(21) 拙稿「日隆聖人教学成立の資料―宗祖御遺文について―」(『桂林学叢』第八号、昭和四九年九月)。

(22) この点については、改めて機会を得て報告したい。

(23) 茂田井戸教亨稿「日蓮教学体系化への動向」(宮崎英修編『近世法華仏教の展開　法華経研究Ⅶ』平楽寺書店、昭和五三年)六頁では、『私新抄』第一三の文を引用して「ここに書名を挙げた日蓮聖人の遺文は、何れも御真蹟の存在する確実なる遺文である。後世の臨・輝両師あたりが好んで引用する偽撰又は真偽未決の遺文圏とは格段の距りがある。これは隆師が宗義の体系的根幹を下種におき、この視点から聖人の遺文全体を眺めた賜であろう。その証左として師の著述を見るに、その引用遺文は上に挙げた標準又は正統と目される御書のみで、与最蓮房といわれるごとき一連の観心系の御書は殆ど引用されていない」などと述べられている。

(24) 「故に六、七、八、九の権実の識の法談は熟脱の時に用ひ、下種の時は用に立たざる間、諸御抄に依用これなし。仍て百四十八通の目録の中に未だ勘へ及ばず」(『宗要集』雑部第七「九識証拠」(『隆教』第五巻、一一八頁)。

(25) 浅井圓道、前掲稿三五頁など。

(26) 「当門流には久年の間諸方に法理を求め、恐らくは諸御抄を極むること数百遍に及び、玄文止六十巻を極め、内鑑外宜・迹本流通を分かちて諸御抄を以て能開能眼となし、玄文止等を以て所開所照となして、開迹顕本の上に本門法華宗を立て、天台宗の諸聖教において真偽を加え、捨邪帰正してこれを用いて助縁となす」(『弘経抄』第九八巻(『隆全』第一〇巻、四四九頁))。

(27) 拙稿「『立正安国論』と日隆教学」(『桂林学叢』第二二号、平成二三年三月) 四、五頁。
(28) 拙稿「日隆聖人著『御書文段』私考」(『興隆学林紀要』第四号、平成二年三月) 五九～六一頁。
(29) 同前、五八頁。
(30) 『隆教』第一巻、三〇七頁。
(31) 『隆全』第八巻、三〇八頁。
(32) 『隆教』第四巻、三七二頁。
(33) 『隆教』第四巻、四一五頁。
(34) 『定遺』六〇四頁。
(35) 株橋日涌監修『日隆聖人文段　主要御書』法華宗(本門流)宗務院、第二版昭和六三年、八七頁、第三版平成一九年、九二頁。
(36) 『定遺』七二〇頁。
(37) 管見に於て、隆師も明確な言及はないと思われるが、実は、『開目抄』の今の文を、詳細に克実したのが『本尊抄』前半ではないかと考えられる。拙稿「『観心本尊抄』拝読私見—佐渡塚原と一谷の間—」(『桂林学叢』第二一号、平成二一年一一月)。
(38) 『日隆聖人文段　主要御書』前掲第二版一一二～一一四頁、第三版一三六～一三七頁。
(39) 前述の如く、この「別体理具三千」は『四帖抄』以降の立場では「別体事具三千」と解され、法体三重説となっている。株橋日涌著『観心本尊鈔講義』上巻(八六～九六頁)・下巻(七七八頁等)、法華宗宗務院、昭和五七年・昭和六二年参照。

(40)『定遺』一四四六～一四四七頁。

(41)『宗要集』五時部第二（『隆教』第三巻、八〇頁）に、「日蓮大士も佐渡已前は此の本迹法門をば秘したまふて已後にこれを弘め、真言宗折破これあり。其の旨は三沢抄に分明なり」とある。類文は『四帖抄』第二（日隆著、法華宗興隆学林編『法華天台両宗勝劣抄（四帖抄）　法華宗全書　日隆1』東方出版、平成一一年、一〇三～一〇六頁）。『私新抄』第八（『宗全』二一三頁）。

(42)『私新抄』第一〇、（『宗全』二七一～二七二頁）。

(43) 例せば『弘経抄』二六巻（『隆全』三巻二八八頁）に、「本書は迹門の面にて権実の理に約して之を釈し、末書は本門の心にて之を釈するなり」と。

(44)「一念三千」の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限ル」等（『定遺』四八九頁）。

(45) 言及は多いが、特に「本因本果の法門」「真ノ十界互具百界千如一念三千」（『定遺』五五二頁）。

(46)「一念三千ノ観法に二ッあり。一ニハ理　二ニハ事なり。…彼は迹門の一念三千此は本門ノ一念三千也」等（『定遺』一五二二頁）。

(47)「縦一念三千」等（「断簡三四八」『定遺』二九八八頁）。

(48)『定遺』七一九頁。

(49)「事行南無妙法蓮華経五字」は、三秘のいわゆる「本門題目」と同じとみられ、「本門本尊」は第一義的には題目を、具体的には上行付嘱の場面で末法の為に題目を付属する本仏釈尊を拝むことを意味すると解する。拙稿「『報恩抄』私見―いわゆる三大秘法に関する箇所の解釈をめぐって―」（近刊予定）参照。

(50)『定遺』一二九七頁。原文は漢文体。

(51)『正蔵第』四六巻、五五頁。
(52) 前掲『法全』日隆1、二三九～二四五頁。
(53) 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」(前掲、六九頁)。
(54)『法華玄義』二上(『正蔵』三三巻、六九七頁)。
(55)『定遺』八四六頁。隆師の著作には『十法界事』は引用がない。
(56)『弘経抄』八一巻(『隆全』八巻、六四二、六四三頁)。
(57)『宗全』第八巻、五一頁。
(58) 拙稿「室町時代の日蓮教学と本覚思想—慶林坊日隆について—」(淺井圓道編『本覚思想の源流と展開　法華経研究一一』平楽寺書店、平成三年)三七〇～三七八頁。
(59)『宗全』第八巻、五四～五六頁。
(60) 例せば『弘経抄』第七巻(『隆全』第一巻、五〇一頁以下)など。
(61)『隆全』第一巻、五頁。
(62)『隆全』第一巻、二〇六～二〇七頁。
(63) 拙稿「室町時代の日蓮教学と本覚思想—慶林坊日隆について—」(前掲)。
(64) 拙稿「『開迹顕本宗要集』考」(『興隆学林紀要』第三号、平成元年三月)。
(65) 拙稿「日隆聖人著『名目見聞』の一考察」(『桂林学叢』第一〇号、昭和五三年三月)。
(66)『宗全』第八巻、三五三頁。
(67)『定遺』五一四頁など。本抄は隆師所引遺文の一である。

(68)『宗全』上聖部、二五一頁。

(69)「余りに観心を好む学者は教相を失ひ、思はざるに謗法を起こすことこれ多し。殊に恵心流に盛なり」『弘経抄』第五七巻（『隆全』第六巻、二四七頁）など。

(70)『弘経抄』第三三巻（『隆全』第四巻、七八頁）。

(71)『四帖抄』第三巻（『法全』日隆1、一二九頁）。

(72)『隆全』第一〇巻四二〇～四二三頁。

(73)「真実の本覚と云ふは本門八品に限るものなり」『宗要集』仏部第九（『隆教』第一巻、二九二頁）。

(74)『隆全』第一〇巻、四二三頁。

(75)『名目見聞』第九、仏立教学院刊、二六三頁。

(76)『定遺』一六五五頁。この遺文は、興風談所「御書システム」平成二一年九月のコラム（http://www5f.biglobe.ne.jp/~goshosys/colum_ft.html）によると、北海道幌延長應寺蔵三行断簡が、日蓮聖人の真蹟ではないかとされている。事実ならば、隆師教学の根拠が一段と補強されたこととなる。

(77) 拙稿「宗祖の教相論に関する一視点」（『桂林学叢』第一一号、昭和五七年一〇月）九六～一〇〇頁。

(78)『定遺』一二九六頁。

(79) 立正大学日蓮教学研究所編纂『日蓮聖人遺文辞典　教学篇』（身延山久遠寺、平成一五年）一七二頁の「観心」の項目では、非常に詳細で広範囲な議論の中で、日蓮聖人の観心義について「五字受持の唱題は釈尊と行者との問題性を実現する観心修行であると同時に法華経世界の実現をはかる立正安国の実践である」等と説明されている。即ち日蓮教学の観心とは南無妙法蓮華経とするのが、一般的な見方であろう。

(80)『定遺』八九五頁。

(81)「鎌倉末から南北・室町にかけて、一般社会の俗化現象に、あい応じて本覚思想における絶対的一元論は単なる現実肯定となり、俗世・俗事あるいは煩悩こそを実とみなし、ついには頽落するにいたったので…」田村芳朗著『鎌倉新仏教思想の研究』(平楽寺書店、昭和四〇年)四六八頁。

(82)『隆全』第九巻三八四頁。

(83)日隆聖人著・法華宗教学研究所編『名目見聞題号釈他三書』(法華宗宗務院、昭和四七年)四七～四九頁。

(84)この点で『本尊抄』に対する私見の仮説を前提とすれば、宗祖御自身の見解ともなるのである。拙稿「『観心本尊抄』拝読私見—佐渡塚原と一谷の間—」前掲、注37。

[付記]

拙稿は、慶林日隆著『法華天台両宗勝劣抄』講読の参考となる話を、という北川前肇教授の御要請によって、平成二六年一月二七日、立正大学大学院において講義した原稿を補訂したものである。このような機会を与えて頂いた北川先生に心から御礼を申し上げたい。

〈キーワード〉　日隆　教学の方法　中古天台　教観　宗学